



五年生になってすぐママが近くの雑貨屋さんで働き始め、穂波は初めて鍵を持たされた。自分で鍵を開けるなんてドッキドキ。いつもの習慣で「ただいま」と言ってしまう。もちろんママはいない。ところがその日「お帰り」と返事があった。穂波は声に誘われ、リビングに飛び込んだ。

「ふ、冬子さん……」

コロコロコロ、手に持っていたリコーダーが袋からはみ出し、床に転がり音をたてた。なんと冬子さんがダイニングテーブルの真下で、洗濯物をたたんでいたのだ。冬子さんは、穂波のおばあちゃんだが、ママがそう呼んでいるので、いつの間にか穂波もそう呼ぶようになった。

「響子さん、これでいいかしらねえ」

「ふ、冬子さん、響子はママ！ あたし、孫の穂波だよ」

「ああ、穂波ちゃん、あら、スベリオパイプ、懐かしいわ。おばあちゃんも小学生の頃に吹いたことがありますよ」  
「リコーダーの事、昔はスベリオパイプっていったの？」  
「あら、今はリコーダーですか。時代は変わりましたね」  
冬子さんは洗濯物のしわをパンパンと小気味いい音を立てて伸ばしながら、ニコニコ笑った。穂波はこの音を聞くのが好きだ。ふっ、ちょっと安心。

※  
去年おじいちゃんが亡くなり一人ぼっちになった冬子さんは、パパの兄、俊介おじさん家族と暮らし始めた。それ以来、月に一週間ほど穂波の家でも暮らすようになったのだ。

「みんなで助け合ってね」と、ママは言った。けど、ママ